想像界の生物相

メンディビルの首長人形

民博 学術資源研究開発センター　八木（やぎ） 百合子（ゆりこ）

資料名	パチャママの聖母
標本番号	H0210692
制作	フアナ・メンディビル、1990 年
地域	ペルー
サイズ	高さ 88cm

ペルー南部のクスコの街に奇抜な格好の人形を作ることで有名な職人の一族がいる。彼らが作るのはおもにキリスト教の聖人や聖母、天使をかたどった人形だが、どれも首が長いのが特徴である。一連の作品は、一族の名前をとって「メンディビルの首長人形」とよばれ、親しまれている。

◆◆◆長い首の由来◆◆◆

首の長いスタイルの人形が誕生したのは二〇世紀半ば。クスコ出身の聖像職人で、工房を切り盛りしていた家長のイラリオ・メンディビル（一九二九～一九七七）が考案したものである。

その着想源は、アンデス高地に棲息（せいそく）するラクダ科動物にある。家族の話によれば、工房があるクスコ市のサン・ブラス地区ではかつて、リャマを用いて農作物などを運んでくる牧畜民や行商人たちの交易が盛んにおこなわれていた。その光景を日々目にするなかで、イラリオの頭のなかに、アンデスを象徴する動物であるリャマやアルパカに似せて、人形の首を長くするという考えが芽生えたという。キリスト教の聖像作りに、アンデス独自の趣向を取り入れた、当時としてはきわめて斬新な発想であった。だが、そのためか、当初は珍奇なものとして、地元では思うように人気が出なかったという。

◆◆◆アンデスの世界観◆◆◆

メンディビルの作品の持ち味は、西洋から持ち込まれたキリスト教文化にアンデス固有の世界観を融合させた独自の作風にある。彼らが作り出す聖人や聖母には、アンデス的な要素が多分に組み込まれている。

なかでも特徴的なのが聖母をかたどった人形である。たとえば、聖母子像では、聖母の腕に抱かれた幼子イエスは、先住民たちが使う毛糸の帽子をかぶり、聖母はしばしば、自ら幼子に乳を与える姿で描かれる。その風貌はアンデスの母子の面影と重なるものである。メンディビルの作品の多くは「処女懐胎」、「イエスの誕生」、「エジプトへの逃避」など、聖書にまつわるエピソードを主題にしながらも、作品自体にはアンデスの人びとが抱くイメージが投影されているのだ。

「パチャママの聖母」と銘打つメンディビルの代表作では、聖母のイメージは豊穣と結びつけられ、アンデスの大地の神であるパチャママのイメージに重ね合わされている。その装いは、西洋のスタイルをとりながらも独特のデザインが施してある。衣装の下部には、アンデスの人びとが神聖なものとして崇める山に聖母の姿が刻まれ、すそ野に広がる大地にはヒツジをはじめとする家畜やトウモロコシなどの作物が描かれている。家畜の繁殖と作物の豊穣をつかさどるパチャママは、アンデスに暮らす人びとにとって何よりも大切な存在である。

アンデスの民衆の想像力を結集したメンディビルの作品は、その後、クスコを訪れた文豪ホセ・マリア・アルゲダスの手により、首都リマで紹介されると、多くの知識人たちの目に触れることになった。それがきっかけで、首長人形は、ペルーを代表する芸術のひとつとして評価され、その独創的な作風は今では国内外で知られるところとなっている。

メンディビルの工房の様子。人形作りをしている職人はイラリオ・メンディビル（右）と妻のヘオルヒナ（左）（クスコの箱型祭壇、H0210195、制作：エンリケ・シエラ、マキシミリアナ・パロミノ夫妻）